



環境団体グリーンピースはクジラ捕獲反対や難民保護などで過激なイメージがあるが、ドイツではエネルギー部門でも活動が盛んである。そのグリーンピースがドイツでつくったのがエネルギー会社「グリーンピースエネルギー」。1998年の電力市場自由化を受けて2000年に設立され、ガスと再生可能エネルギーの電力を提供している。

エネルギー協同組合によって運営され組合員2万5000人、顧客14万人を誇る。エネルギー・シフトと持続可能な社会を推進し、脱原発、脱化石燃料を掲げる。シェーナウ電力会社のようにエネルギー供給だけでなく、ビジョンを持って啓蒙活動をしている。

隔年で開かれるグリーンピースのエネルギー会議に参加した。組合員や顧客など170人がエネルギー・シフトと持続可能な社会を推進し、脱原発、脱化石燃料を掲げる。シェーナウ電力会社のようにエネルギー供給だけでなく、ビジョンを持って啓蒙活動をしている。

持続可能な世界をめざす グリーンピースエネルギー



互いに信頼しあっているように見えた。

職員を70人以上抱え、掃除する人も含めて派遣社員はおらず直接雇用している。職員の働きやすさを重視し、水やコーヒー、お茶をはじめオーガニックのリンゴが無料で常備され、労働時間はフレックス制である。

社内の備品も安ければいいというわけでなく、リサイクルできるサインペインなど環境に配慮したり、顧客の製品を使ってお互いにウインウインの関係を心がける。通勤にはマイカーではなく自転車を推奨し、採食主義をすすめるなど、組織の信念を多角的に実践している。

「働きやすさが持続可能とどういうつながりがあるのか」と思う人もいるかもしれません。広報担当者によると『持続可能』の意味は広い。リサイクルペーパーを使うだけでなく、会社と

して働きやすい職場を提供することは持続可能な社会に寄与すること」との答えた。

同会議の目玉は、大手電力会社バッテンファルのアンドレアス・ヴェッター氏のトークだった。同社はスウェーデンの国営企業で、原発を所有し、ドイツ国内に350万人の顧客を持つ。ヴェッター氏は参加者から「原発は安全なのか」「エネルギー供給のビジョンはどうなっているのか」と批判的な質問の総攻撃を受け、「経済的に見合わなければいけない」「これからどんな新技術が出てくるのかわからないから、将来のことは言えない」と逃げ腰の返事。しかし、そもそも一人でこういう場に出てくるのが偉いとほめるべきかもしれない。

会議やワークショップで参加者は積極的に発言しており、社会に役立ちたいという思いが溢れていた。会議は、知識と関心のある人が意見交換をする場となっていて、これも持続可能な社会づくりのひとつだと感心した。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

日本の母が「パルテノン神殿を一度見たい」と熱烈にいうので、明と3人でギリシアに遊びに行きました。

明はパパといつもギリシア語で話しているし、ドイツでギリシア語補習校に通っているし、毎年アテネのパパの実家に行ってるので、3人で旅したら明に通訳させればいいと思っていました。ところが「知らない人とは話せない」と恥ずかしがり、お店でもレストランでも全然しゃべりません。観光地は、私の英語でなんとかなってしまう。



そこで私が「この子、ギリシア人なのよ」と周りはびっくり。お菓子屋さんのおばさんにギリシア語で話しかけられた明が流暢に答えるとさらに驚いて、明のほっぺをつまんだりお菓子をくれたりしました。(写真)

確かにアテネではおじいちゃんたちがすべてお膳立てしてくれるので、明は他人としゃべる必要がない。日本みたいに学校に入れるのはギリシアでは難しいし、親戚としか話す機会がないのだとはたと気付きました。また、怖がりでシャイな性格もなんとかする必要があります。